

秘仏・高野山南院「浪切不動明王」考

——弘安の蒙古襲来と志賀島——

A Study on Treasure in Kōyasan Nan'in Temple

——The Secret History of Mongolian Invasion 1281——

海 津 一 朗

Ichirou KAIZU

(和歌山大学教育学部歴史学教室)

2017年7月10日受理

Abstract

所謂「元寇」「弘安の役」において高野山の住僧集団が博多志賀島に下向して異国降伏祈禱を行なったという南院浪切不動伝説についての言説を史料批判する。高野山には鎌倉幕府の出先機関・金剛三昧院があり、恩賞奉行の安達泰盛勢力はそこを拠点に対元戦争の戦争指導を行っていた。その中心人物こそ高野検校賢隆であり、彼が破格の出世を遂げた背景は、志賀島下向においてほかにはないことを論証した。志賀島の神戦は真実であった。

1 蒙古襲来と神戦の先行研究

著書『神風と悪党の世紀』（講談社現代新書、1997）を書いたのは20年前のことだが（反自民連合政権〈細川・羽田2代〉の崩壊時）、「現実」路線なる軍事大国主義台頭に対して社会史研究の成果により中世の「現実」を再現して対峙するという政治的な意図があった（「あとがき」に明記）。軍事大国路線とはたとえば井沢元彦著『ケガレと茶碗』のように、神風信仰にまどわされず幕府の軍勢力の意義を正當に評価せよ、というような改憲派の論陣である^①。

井沢のような思考がいかに現実離れしたものであるかについては、完膚なきまでに打ち破ったつもりだった。だが、20年の時をへて、「社会史研究の見直し」という若手研究者の権力論志向の思潮にともなって、単純な陣取りゲームの戦争研究への回帰が始まった^②。神戦が射程に入っていない「中世戦争論」が研究分野の主流となり、蒙古襲来についても服部英雄著『蒙古襲来』が現れた^③。実証の装いをとっていても、その視野は井沢のプロパガンダと50歩100歩である。

服部の提起の中でひとつ注意すべき指摘に、博多湾岸志賀島の合戦への注目がある（これとて堀本一繁の批判があるのだが^④）。服部は無視しているが、私も神戦の観点から弘安の蒙古襲来における志賀島に特別の注目をしてきた。弘安の蒙古襲来時、高野山南院に伝わる浪切不動が志賀島に動座していたことを指摘したのは『週刊朝日百科・司馬遼太郎 街道を行く』47、2005年のことであった。紀行文風のエッセーと思われるかもしれないが、志賀島への浪切不動動座を史実と認定した初めての仕事であった^⑤。高野山権力の神戦に注目して和歌山にきた私が、神戦版の丹生四社明神像を発見したのは周知に属する^⑥。今回の発見で、高野

山の神戦体制の全体像が明らかにできたものと思う。

これについては、すでに学術論文であらためて論証し^⑦、最近山陰加春夫が市町村史・概説書においても同様の指摘をしている（^⑧ただし山陰は神と仏を区分して考え高野山の神戦体制とは見ていないようだ）。

弘安の蒙古襲来において、博多湾岸の志賀島において幕府勢力による神戦の本陣が張られていた事実は、服部の見出した志賀島合戦と併せて重視されるべきことがらである。ここでは、私は朝日新聞社の助成で出張調査した2005年以降の記録、また近年の南院での聞き取り調査等を合わせて、浪切不動についてのモノグラフをまとめておきたい。このような記録が風化してしまうのを恐れるためである。

2 高野山南院の浪切不動

浪切不動（大聖波切不動明王）は、現在高野山別院（別格本山）南院の本尊として安置される。唐にわたった空海が、師匠の恵果より与えられた梅檀の霊木を用いて自ら刻んだ守り本尊（空海自作）という。「浪切」の名の由来は、空海帰国時の航路が大荒れになったのを天を鎮めて守り抜いた霊験に基づく。秘仏として普段は公開されておらず、年に一度四季の祈禱のうち夏季祈りの時に（旧暦五月一日夜半～二日）、南院を出て覚皇尊^{がくこうみま}の道を通して御社（檀上伽藍の丹生高野明神）拝殿の山王院に安置されて祈禱に用いられた^⑨。この時、御社に向けた正面には、南院所蔵の御本地供曼荼羅（胎藏界大日・金剛界大日・弁財天・千手観音・ウーン種子）掛軸がかかけられている（内海照隆南院住職の御教示）。

現在国の重要文化財に指定されており、「唐代」という通常もちいない時代鑑定になっているのも「秘仏」の特性を重視したものであろう（写真1）。だが何より



写真1 秘仏浪切不動(南院提供)



写真2 秘仏を南院から山王院に移動する(1999年)

もこの尊像を著名にしたのは、その来歴である。空海を守った霊験により、日本の国家的な危機に際して、鎮護国家の尊像として活躍した。とりわけ、神戦の考え方が広まった中世社会においては、国土を外敵から守る神として大きな役割を担った。もとは高野山に伝わっていたわけではない。

空海の帰国後は、宮中の真言院、ついで神護寺・醍醐寺等に安置されて数々の祈願に供されたが、承平・天慶の乱が起ると朝敵・新皇将門の覆滅のために名古屋熱田社に動座して調伏祈禱が試みられた。熱田社は三種の神器のうち草薙の剣をもつ宮であり、浪切不動はその利剣をもって最高の調伏を行ったのである。

その後、高野山の拝殿山王院に祀られて丹生明神と一体の尊神と崇められたが、当時山王院を管理したのが東大寺南院より入山した真興(南院初代)であった。

中興開山維範は優秀な学僧であり、このときに浪切不動を南院に遷して本尊とした。南院は現在地ではなく、南院の名の通り、本寺の南側、現在の霊宝館駐車場の辺にあった。

弘安の蒙古襲来がおこるや、南院院主の賢隆に率いられて今度は最前線の博多に出兵した。志賀島にて、高野山僧による五壇護摩の祈禱、異国降伏祈禱が行われて蒙古は神風に沈んだ。この時の霊験によって、帰山した南院賢隆の名声はたかまり、ほどなく高野検校に就任した。このような事績は『高野春秋』や南院聖教にまとめられており、近世半ばには流布していたと思われる。

その後も、「世界大戦」など国家存亡の危機に際して、浪切不動による降魔調伏の儀礼が行われた。志賀島での事績顕彰としては、江戸幕末の院主研暢(1875没)の時に、浪切不動に瓜二つの摸刻を作って、祈禱遺跡という「火焰塚」に奉納したという(写真4)。火焰塚の名の由来には諸説あるが、浪切不動の火焰形光背が埋められたためとも、火炎憤怒の相で火界の呪を誦したためともいう(後述)。

その後、現院主の代になって、1974年の元寇700年の節目にあたり博多祇園山笠祭の五番山笠に「志賀島降魔火焰」浪切不動を作るという行事があった(『博多祇園山笠五番山』)。

先述の通り現在、浪切不動は年に一度旧五月一日夜～二日に公開されて、拝殿山王院の夏季祈禱に動座する(写真2)。安置される厨子には、これも南院の所蔵になる御本地供曼荼羅が掲げられた(前掲註9)。四社明神が仏像として描かれたものである。調伏の神である四社明神を、仏の霊力によって護持するという、文字通り最高の異国降伏の祈禱にはかならない。この祈禱の起源については、すでに山陰加春夫が解明している(前掲註9)。南北朝期に「四季の祈り」が定められると、全山の秩序を維持するための調伏祈禱が行われた。この際、寺家への敵対者は「悪党」として、大鳥居のたもとで名前を焼かれるなどして呪詛された。現在の夏季祈禱は、このうちひとつだけが残されたものである。

以上が、寺家に伝わる所伝をもとにしていくつか補足したものである。

3 志賀島動座の真偽

高野山側の准公式記録として知られる『高野春秋編輯録』には浪切不動の志賀島動座について次のような記事がある(刊本岩田書院、日野西眞定校訂)。

「弘安四年

五月日、詔当山及諸寺社、令抽異賊降伏之惴禱<明神官符詳悉于茲>、仍供奉南院不動明王於筑前国鹿島、執行五壇大秘法、中壇御導師長者兼座主醍醐僧正定済、片壇南院阿闍梨賢隆・蓮上院入寺長任等也<外二僧旧

史未考之)、是任院宣及鎌倉殿御教書也〈考、此尊也、大師帰朝之時、為舶中安泰魔風降伏、将来之、為安国之鎮將、然將門追討之時、勸請尾州熱田社頭、冊降伏之本尊、而東夷大治、任此吉例今又如斯〉

八月七日(中略) 山僧亦護持本尊帰山也〈明王還御之時、留火焰形於鹿島、蓋是依明王之示現為異国鎮壓乎、又自武家被惓請之乎、尋求島僧未明也〉

十二月十三日 静弁師退讓檢校職、賢隆替補焉〈隆師字智眼房、南院主、此秋帰自鹿島、法威鳴当世、此人州之荒川莊之産也、執行代釈迦文院幸明勤之〉

弘安五年

正月朔 檢校賢隆不及朝拝〈(前略)爾時座主定濟僧正被推挙之、是所謂去年同在鹿島、測知為其法器、故令静弁辞退当職、而補任檢校職了〉

『高野春秋編年輯録』は、法泉院・修禅院の学僧である檢校懷英の著作であり、文献の博搜にもとづいており信頼すべき記事も多い。だが一方、思い込みによる誤解もあるので十分に注意する必要がある。これによると、弘安の蒙古襲来が迫る五月、院宣と関東御教書をうけて檢校定済・南院賢隆らが鹿島(志賀島)に下向して、大師帰朝の守り本尊の不動明王を用いて五壇護摩の異国降伏の祈禱を行い、八月には凱旋帰国して、一二月には賢隆が檢校になったという。これに諸伝を加えた著作が南院に伝わる「本尊縁起」続風土記所収^⑧である。

残念ながら、この賢隆一行の志賀島下向、異国降伏祈禱の挙行については直接実証する同時代史料が見当たらない(「浪切」の呼称もいまだ見られていない)。だが、賢隆が破格の出世をして檢校の地位に就いたこと、幕府が丹生明神に対して特別の崇敬をして護持僧を派遣したこと、ほどなく浪切不動の四季祈禱が開始されること、など符合する史実が散見する。

南院の関係者を除いて、「筑前鹿島」と奴国金印出土で著名な志賀島を結び付けて考察するような研究はなかったと思う。2005年、朝日新聞社出版局より「街道を行く」の執筆依頼を受けた私は、ビジュアル版の取材費・撮影費をとって志賀島の現地に臨んだ。運悪く、



写真3 破損する志賀海社境内の石造物(2005年)

この年の福岡は台風14号の被害が甚大で、志賀島の神社境内の石造物も破損したままであった(写真3)。

だが、事前に九州の地元の研究者に意見を徴収しており、近世地誌等のご教示にも預かっていた。地元研究者のほぼすべてが、高野山サイドの史料には否定的で、浪切不動の動座は虚構であると断じていた。ご教示いただいた以下の志賀島地区の地誌類に、火焰塚は現れていない。したがってごく近年の捏造遺跡であろう、というのが彼らの主旨であった。

その時、ご教示を得た地誌類は以下の通りである。このすべてが活字になっており、同地域の歴史文化に対する憧憬の深さが良くわかった。

表 参照した志賀島関係地誌

- 青柳種信著『筑前町村書上帳』福岡古文書を読む会校訂 文献出版 1992(含む 続風土記御調子二付調子書上帳 勝馬村)
- 加藤一純・鷹取周成共著『筑前国続風土記付録』上 川添昭二・福岡古文書を読む会校訂 1977
- 貝原益軒編『筑前国続風土記』伊東尾四郎校訂 文献出版刊 2001
- 伊藤常足編『大宰管内志』上 文献出版刊 1989
- 筑紫豊著『金印のふるさと志賀島物語』文献出版刊 1980

(三木隆行・福岡市教育委員会文化財部文化財整備課ノートより)

いずれの書にも、志賀島のみならず、多くの蒙古襲来関係の史跡が載せられているにもかかわらず、火焰塚の記載を欠く。最後の近年の郷土史研究を見ても、火焰塚について確たる証拠というものが記されておらず、漠然としたものであった。このような状況を見て、地元の研究者は、ひとしく高野山勢力の志賀島下向には否定的だった。

1974年の時点で元寇八〇〇年記念山笠「志賀島降魔火焰」作りが行われたことなど、のちに南院にて知ることになる。調査当時は、地元になんか浪切不動への崇敬があることは教えてもらえなかった。地元の民衆意識と学芸員の観光マインドの落差かもしれない。あるいは、このような地元の思い入れに対し、研究者として冷静な対応を求めたのであろう。下準備の過程で、私は現地調査にほとんど期待薄になっていた。どの段階で史跡の造立(歴史の捏造)がなされたのかに関心が移っていた。

4 志賀島調査

志賀島の浪切不動についての研究は、博多の寺院である金光山宝得寺のネット情報が、「浪切不動明王」を独立して立項しており、詳細であった。調査にあたって、まずこの宝得寺那珂川道場(那珂川町別所573-3)を



写真4 火焰塚(2005年)



写真5 志賀海神社境内遷移所(2005年)

頼って情報を確保して、現地の関係者へ紹介いただくという方法を採用した。住持の本田宝勝・和子夫妻に島内を御案内いただき、火焰塚の鑰を管理する中西学氏にも話を聞いた。同氏は、島鎮守の志賀海神社の八乙女職(神楽を舞う神職)をつとめる家柄で、護摩を焚いた場所や、火焰光背の行方について、他に漏らしてはならないという秘密の口碑があることを聞いた。とくに砕け散った浪切不動の光背については、島内の秩序にもかかわる独自の所伝があった。

このように、志賀海神社の氏子圏とも密接にかかわるかたちで、火焰塚の伝承は深く地域に根ざしていた。なお、現地で驚いたことは、火焰塚の殿舎内には浪切不動の模刻品が納められていたが(のちに19世紀後半の南院院主研暢(1875没)の奉納と判明した)、それと同時に天野四社明神の祠が勧請されていたことである。高野において、本殿・御社にむけて拝殿に浪切不動を据えて呪詛するという調伏祈禱の基本形が、この火焰塚においてもしかと守られていたことが確認できた。もし、幕末期の「史実捏造」だったとすれば、このような中世的な神仏習合のありかたは採らずに、単体の浪切不動の霊験を一元的に強制したのではなかろうか。そもそも地域の祭祀の中に根ざした「伝承」が、幕末に史実の捏造で可能なのか否か、あらためて疑問を呈しておきたい。

もちろん、なぜ志賀島の近世地誌に火焰塚が記述されないかという問いへの答えには到達できていないのだが^⑩。

5 まとめ

以上の検討によって、「弘安の役」において博多湾志賀島に幕府軍の本営が築かれており、その中核に秘仏浪切不動と四社明神があったことはほぼ確実になっだろう。これによって、近年服部英雄の論証した志賀島が主戦場になっていたことの意味は、服部の意図とは逆に、かえって中世人の神戦＝仏神依存の実態を垣間見せるものであった。この後、紀州の歴史は、神の国「御手印縁起」の再建に向けて動き出す。呉座勇一が例外として切り捨てていた紀州の歴史こそが^⑪、じつは中世社会のもっとも典型的な歩みであったことも明らかになる。中世の神風信仰＝神国思想の実態とは、浪切不動に対する信仰にほかならない。和大大では、日本史の入試試験にこの秘仏を登場させたが^⑫、周辺事態が言われて空虚な集団自衛の叫ばれている今こそ、民衆の日常意識に根ざした救国の運動に学ぶ必要があるのだろう。

〈註〉

- ① 海津『神風と悪党の世紀』の執筆意図については、海津一朗「神国日本誕生の舞台裏」(『本 読書人の雑誌』20-4〈通巻225〉1995)参照。
- ② 海津一朗「呉座勇一『日本中世の領主一揆』」『史学雑誌』一二五ノ四 2016。
- ③ 服部英雄『蒙古襲来』山川出版社、2014。『蒙古襲来絵詞』『八幡愚童訓』の史料批判により元軍の拠点志賀島を重視して、先行研究の弘安海戦(鷹島全滅)が「神風史観」にミスリードされている危険性を指摘した。対外関係(とくに戦争)分野の研究が国家主義の偏見によって歪められているケースは多々あり(それが現在の対外関係研究の多出という中世学界ストリームの原因であろう)、私も「元寇」研究をするなかでこれを日々痛感している。だが服部は、先行研究を切り捨てる際に「神風史観の偏見」という形でくくり、糞も味噌もいっしょに批判する。いまこのような形で、民衆史・地域史・社会史の同盟軍と思っていた服部から批判されたのは心外である。個別の点で、服部の論証に学ぶところはあがあるが、研究史理解ははじめ根源が腐っているため次の点のみ指摘して諸賢の検算に委ねたい。
- *1 八幡愚童訓と竹崎絵巻を対置して神(寺社)の立場・武士の立場とするがこのような二律背反に理解するのは非常識ではないか。ともに神戦の形態を示すものであり、八幡愚童訓に描かれた大量の武士の記述は何を意味しているのか。局所のみを取り上げただけで、ただし史料批判になっていない。
- *2 「神風」が吹く、などと単純化するが、宗教暴力として国家論上の重大な論点である神戦が、中世の民衆武力と関係(なにかなく、川添昭二以来の神戦の研究蓄積のある九州大学で)を熟知している筈で、あえてそれを等閑視して井沢並みのレベルで何か政治的な意図があるのではないかとまで勘繰りたくなる。
- *3 竹崎絵巻には神風が描かれない、というがそうだろうか。季長らの行動規範自体がすべて神領興行法を受け入れた

御家人層の典型的心性をしめしていないか。たとえば、弘安神戦の本拠地で奪回活動をおこなったなど、今回服部が明らかにした志賀島重視の戦略発見事実自体が、私の神戦研究をおおいに充実させてくれたのだが。

なお、描かれた弘安戦場を鷹島海域ではなく志賀島だ、とする点についてはすでに対外関係プロパーの研究者からの疑問が寄せられている(註4 堀本一繁)。武士の戦場が大切ではないとはいわない。だが対外戦争下での民衆社会を問う上でのウエイトは低くなるだろう。自衛隊の戦争指導をみて集团的自衛権の帰趨がみえるわけではない道理である。

- ④堀本一繁「書評・服部英雄著『蒙古襲来』』『歴史と地理』687、2015、同『『蒙古襲来絵詞』の復原にみる竹崎季長の移動経路』『交通史研究』78、2012。
- ⑤海津一郎「蒙古襲来時の異国降伏祈禱の痕跡」『週刊司馬遼太郎街道をゆく』47肥前の諸街道、2005
- ⑥四社明神像の発見経緯について、森克己論集への付録中で次のようにまとめた。

二〇〇一年初、丹生明神(かつらぎ町天野神社)の神主家丹生広良氏(故人)の所蔵資料の中から、異形の丹生四社明神画像を発見した。武装した丹生明神四神たちの頭上に海原を荒らす大カラス四羽が描かれたものである。箱書きによれば、一七〇九年学僧懷英の修補になる天野宮四所大明神異賊降伏尊影であるといい、異国降伏祈禱への恩賞関係文書一卷(鎌倉遺文一八一三四号文書)とセットで伝来していた。神が獣など異類異形に化身して戦場に参加して敵兵(ないし敵神)と対決するという、中世的な神戦の観念を図示したものである。飛来したカラスたちはそれぞれ武装四神の化身であり、海上は玄界灘の戦場、海から立ち上る炎は戦闘の表現であった。紹介に際して、「中世に遡る類形の図様が伝来している可能性」を強調して全国に情報をもとめたのも、この中世的な画像が異国降伏祈禱や民衆教化に際して使用されたものと考えたためである。幸いにも、高野山西禅院に伝来する同態画像(室町後期)を発見し(村井章介編『日本の時代史』10、吉川弘文館、〇三年・一八五頁)、さらに和歌山県立博物館の天野神社の特別展において、南北朝期にさかのぼるという金剛寺版「四社明神像」(東京都指定文化財)が確認された(和歌山県立博物館図録『天野の歴史と芸能』〇三年)。これによって、蒙古襲来から南北朝内乱期にかけて、山内における改革派の集団が、神戦や殺生禁断など民衆教化に際して活用した絵解き教材と台本が明らかになった。民衆運動の熱狂を考える上のかけがえのない手がかりであり文化遺産なのである。

- ⑦海津一郎「異国降伏祈禱体制と中世一宮興行」(井上寛司編『中世一宮制の歴史的展開』下 2004)
- ⑧山陰加春夫「鎌倉末期の社会変動と天野社・高野山」(同『中世寺院と「悪党」』清文堂、2006、初出は『かつらぎ町史』通史編・2006に同)、『歴史の旅 中世の高野山を歩く』吉川弘文館、2014にほど同趣旨で叙述。
- ⑨「四季祈禱」について初めて歴史的な考察したのは山陰加春夫「南北朝内乱期の領主と農民」(『新編中世高野山史の研究』清文堂、2011 初出は1984・日本史研究会大会報告)。筆者も赴任の年に山陰氏より「夏季の祈り」について『高野山四季の祈り』佼成出版社1995等でご教示を得て参列した。当時は石切講衆が秘仏の道行き(覚皇尊～蛇腹道)以下の行事を仕切っていた(写真2参照)。
- ⑩本尊縁起の全文翻刻は以下の通り。①恵果と空海との共同制作になるという始原 ②空海が帰国の渡海に際して霊験(「截浪不動」の称の由来) ③神護寺・醍醐寺・熱田神宮をへて高野山に遷る。熱田での剣の伝説。④「閻山の本尊」として山王院に祀られ維範により南院に遷る ⑤志賀島での異国降伏祈

禱 ⑥その後の信長撃退など「怨家退散の秘法」。

『南院本尊縁起』(『紀伊続風土記』所引)

在昔延暦の末、吾高祖遍照金剛秘密大教を伝んか為に海を踰って唐に入青龍寺の恵果和尚に謁して業を受く。和尚慇に鉄塔の秘願底を傾て完附す。纜を解て東に帰んとする時和尚告て曰く「汝国に帰り国家を鎮護し蒼生を津梁すへし万里の峻波跋涉尤難し、宜く不動の威力を偲るへし」と乃ち祖々伝附の霊材を与ふ。大師是を得て刀を運して三尺の尊容を彫刻し和尚点眼加持し給ふ。和尚の教示空しからず海路半はにして猛風暴に起り波涛怒り鼓て船舶簸蕩す。舟人みな魚服に葬られんことを哀む時に大師攘厄を祈求すれば明王忽ち光を放ち宝剣の御手頻りに動く。舟中の人は是を見て驚異す。時に応して洪波止息し便風一陳して安靜に博多の津に帰着し給ふ。截波不動と称する事は由なり。初高雄山に安置して天下安寧の本尊とす。爾後貞観年中聖宝尊師醍醐山を創す。伽藍を経始するに丁つて魔魅祟りをなして榮へず。宝師焼害を攘んか為に本尊を醍醐に迎請して冥護を乞。日ならずして梵福賑ひ緇徒林をなす。長保元年東夷蜂起して冠をなす。一条帝諸將に命して討伐せしむ時に醍醐の山徒夢みらく。不動尊を熱田の神祠に移して懇祈せば天下乃ち昇平ならんと山徒議して鳳闕に奏す勅して霊夢に任す。幾も無して凶徒盡く敗亡す。帝叙信益深ふして祠地に就て堂塔及び十二の僧院を建て二六時中供養雲を興さしむ。延久二年諸徒夢中に明王威容を現して告て曰く「吾高野山に登り大衆の法味を受んことを欲す」と覺て後相語るに梵感皆同し本尊に別れ奉らんことを惜て敢て他にかたらず。重て又託して曰く「吾汝小子等を棄るに非。利劔を留て我に換へ以て覆護に充つへし」と緇徒各夢を説て驚歎し夢事を以て具に、後三條帝の聖徳に達す。是に於て霊像を王城に迎へ花香を献し、帝御榻を下て胆礼し給ひ旧剣を熱田の劍祠に奉藏せしめ昔し草薙の宝剣を熱田の別祠に納むるは是を劍の祠と云今度不動の剣を合藏す 今時土用の祠と号する是なり時の良治に命して新剣を模造せしめて明王の玉手に把しむるに肯て受給はす。帝奇異の敬心を起して自ら斧を揮て竹剣を製し給ひ是を持せしむるに宛も待所あるか如にして受給ふ今持し給ふ所の劍即是なり重て、勅有て高野に奉移て兩大明神の前殿山王院に鎮座なし奉り閻山の本尊と敬崇し学徒輪次に日々の法供匪懈に南院維範智行兼備せり山徒風靡して欽仰す寛治年中師山王院に詣して法軌を修す。明王の像徐々として師の座に近前す。師散杖を取て玉趾を厭て曰名体相違如何と。像輒ち止る。列座の門徒驚歎せざるはなし。時に、仁和の性性親王山に登て心水を澄すこと日久し是を聞て欽賞し明算良禅等の諸徳と相謀て霊像を南院に遷座なし奉り師をして別当たらしむ。弘安三年太元至元十七年蒙古日本を襲ふ。本尊を山王院に出し奉り大衆番を結て一万座の護摩を修す。幾ならずして賊兵退く。四年四月五日同十二日天野の祠第三神託して曰く「蒙古此年冠をなして止ます。今年亦我朝を襲ふ。此挙大軍を以て一挙に我本邦を呑んと謀る。不動明王火界の呪を誦して神威を助けは孟秋の月吾邦旧治に復すへし」と。又八幡大菩薩託して曰く「秘密の教力を偲すんば防御最も難し」と此両神託を京師及び鎌倉に聞す。山徒又不動尊を山王院に出し群参して一万座の秘法を勤修す。復官命に依て不動尊を別船に奉載し権檢校本院の賢隆及び諸の龍象相共に護送して紫禁博多の地に於て大壇を嚴淨して精修持念すること累日、遂に五月廿三日元兵廿四万軍船四千に乘し東を指て一斉に博多の浦に至到す。旌旗翻翻陸地を望て鼓噪す、其声天地を動すこと怒雷の如し。本邦の諸將兵を分て防ぎ戦ふ。此時海上に流失を飛し波頭に火焰を翻し彩龍潮を卷て風雲颯爾たり火界真言の靈託符節を合せたるか如し。官軍の鋭氣一以て万に敵す。元賊勇なりといへとも旌旗数々に乱る七月晦日の夜神風俄に起て狂浪山を倒し天を射る。賊船簸か如に動揺し忽ち波底に傾覆して溺死するもの十万人海

魚の口を遁れて漂散する者十万許余残船を五島の海上に集む。官軍又逐て終に是を鑿にす。閏七月七日降る者三万余人其中三人を放て本国に還らしむ。本尊重て淨侶に託して火焰形を鹿の島に留む。^{蓋し永世外冠をして我君子国を窺はさらしむるの法謀を貽すとぞ。今鹿の島に火焰坂の遺命あるを知ぬへし}毎歳四季の仲の月朔日より四ヶ日本尊を山王院に出し奉て、大衆雲集して鎮護国家の精祈を抽^{是を四季の祈りと号す}すること此時より始て永式とす。天正年間信長公我山の仏法を燬滅せんとして大軍を使令して四方の山の麓を囲む。山徒議して本尊を金堂に遷し怨家退散の秘法を勤修す。第三日に当て雲霧深く山外を覆ひ白日宛も闇夜の如し。火聚往々空中に飛て其響き連砦を発するに似たり。諸將軍卒皆震懼して退く。嘗て金剛頂院前官栄範初め本院の学寮に寓して晨昏本尊に奉仕すること特に至れり。一夜夢中に本尊形を現して曰く「汝慈救の梵文を以て我を図して帰命せよと範平日絵の事に闇きを以て戦兢して如何ともすることなし。明王重て「我常に汝か懇信を憐む試に揮毫せよ」と忽然として小軀に變す、夢覺て感喜汗生し筆を揮て夢見

る所を図す。魁偉威嚴宛然として台燈も差はす。今印摸する所の小影即是なり。元和七年十一月南院本尊は天下安全四季祈禱の本尊たる故、仏供燈明料として安楽川庄内脇谷空地一所寄附せしむる所自餘に混せず田畠開次第に収納あるへく諸役免許の旨寺務門主碩学中連署あり。爾しより南院全秀堯遍良意三代の間人畑田畠開発し脇谷村と云。其氏神檀寺堂社を創造し良意山脇谷寺といへり

⑪なお、この調査に際して、福岡までの往復旅費と写真のプリントについてはすべて版元の朝日新聞社に実物支給をうけた。ネガプリント類の一切は同社編集部の管理下にある。

⑫呉座勇一『戦争の日本中世史』新潮選書、2014年 72頁

⑬海津一郎編「反逆者の国わかやまー和太の日本史入試問題」(東悦子ほか編『わかやまを学ぶ 紀州地域学事始め』清文堂2017)。ただし、一般出版のために試験問題には画像掲載されていた浪切不動写真はここではカットされている。